

シリーズ

「ある監督官の問はず語り」(第 1 回)

一人を育てる魔法の言葉

将棋指しには、個性的な人物が多い。

定石に囚われない升田幸三。生ける伝説・加藤一二三。一時代を築いた中原誠・米長邦雄。光速流・谷川浩司。そして前人未到の七冠・羽生善治。誰も彼も、エピソードに溢れた棋士たちだ。

中でも、一際将棋ファンの心に強い印象を残した棋士に、村山聖がいる。

昨年、松山ケンイチが主演した映画『聖』ですでご存知の方もいるだろう。ボサボサ髪の異様な風体にして、奨励会入会からプロデビューまで異例の速さで駆け上った才覚から『怪童丸』の異名を取った棋士である。もっとも、よく知られているのは、その風貌や才能よりも、膀胱癌で二十九歳で夭逝するまでの短い人生を将棋に燃やし尽くした、苛烈な生き様の方にある。

彼の一生については、他に書籍があるのでそこに譲るとして、ここでもうひとりクローズアップしたい棋士がいる。森信雄である。

森は一般的に知られた棋士ではない。失礼な言い方になってしまうが、強くもなければ、個性的でもない。しかし、兵庫の方々には是非知っていただきたい棋士である。なぜなら、森は宝塚に居を置く『兵庫の棋士』だからである。

そんな森は、実は『育て上手』で知られている。森は、いつも多くの弟子を抱えている。彼の門下で学びプロ棋士になった者は十名あり、先述の村山もそのひとりだ。村山も、森を心から尊敬していたという。森自身の成績は必ずしもパツとしなないにもかかわらず、なぜ彼はかくも育て上手なのだろうか。

話は変わる。筆者がまだ新人だった時代、Nさんという方面主任にお仕えをした。

Nさんは非常にユニークな方で、まず見た目がまったく役人らしくない。一言で言えば競輪でよく見かける雰囲気だ。髪は半年に一度くらいしか切らず、鼻髭も伸ばしっぱなしだ。背広は嫌いでネクタイを締めず、いつも靴底が剥がれかけた突っ掛けで歩く。もちろん監督に行く際はきちんと作業服、安全靴を着用するが、それ以外はまったく自由な人であった(まだ大らかだった時代の話である。今だったら、こんな執務態度は許されない)。

しかし、そんなNさんを筆者は今でも心から尊敬している。なぜなら、この方ほど後進を気に掛けてくださった方には、いまだお仕えしたことがな

いからである。

Nさんは、とにかく人をおだてるのが上手かった。まだ新人で何もできなかったはずの筆者も、なぜかやたらと褒められたのを感じている。そのおだてに乗せられるがまま、あれこれと調子に乗って勉強しているうち、気が付けば一人前の監督官となっていた。「ああ、この人はなんて教え上手なんだろう」と、そのときに気付いた。

後になり、Nさんはこんな教育の極意を教えてください。「上司はな、いつも『さすがや』やぞ」「さすがや? 何です、それ」

「魔法の言葉や。『さすが!』『すごい!』『頑張ってるな!』『やればできる!』これを口癖にしておけば、どんな部下でも勝手に発奮して、育つぞ」

とんでもないことを言う人である。何しろ、どんな部下でも、いかに出来が悪くとも、どれだけ腹が立ったとしても『さすがや』を使えというのだ。そんなこと、できるわけがない。だが事実、筆者を含むさまざまな人材がNさんの下で育った。『さすがや』は真理なのだ。

再び話を森棋士に戻そう。森にはひとつ、口癖があるのだという。

それが、「さえん」だ。つまり、冴えないなあ。そんな言葉を、森は実にしみじみとした口調で、弟子に呟くらしい。

あまり前向きな言葉ではない。言われた弟子もどう思うだろう。「冴えない奴だなあ」か、「冴えない対局だなあ」か、それとも「俺は冴えない人間だなあ」か。

しかし、森の下で多くの棋士が育っている事実を見るに、こうした他愛のない呟きの中にも『人が育つ』秘訣があるように思えてならない。「さえん」という呟きもまた、魔法の言葉なのである。

育て上手の森とNさん。二人が使う魔法の言葉はまったく違う。だが、よくよく考えてみれば共通しているものもあると筆者は感じている。その答えは……ここでは述べない。なぜなら共通項がわかったからといって、簡単に応用できるものでもないからだ。人には、その人なりのキャラクターを踏まえた魔法の言葉があり、それを自分で見つけ出さなければならないのだ。

四月は桜、そして希望に溢れた新人が職場に来る季節である。筆者も、自分なりの『魔法の言葉』を見つけて、彼らを一人前に育ててみたい。